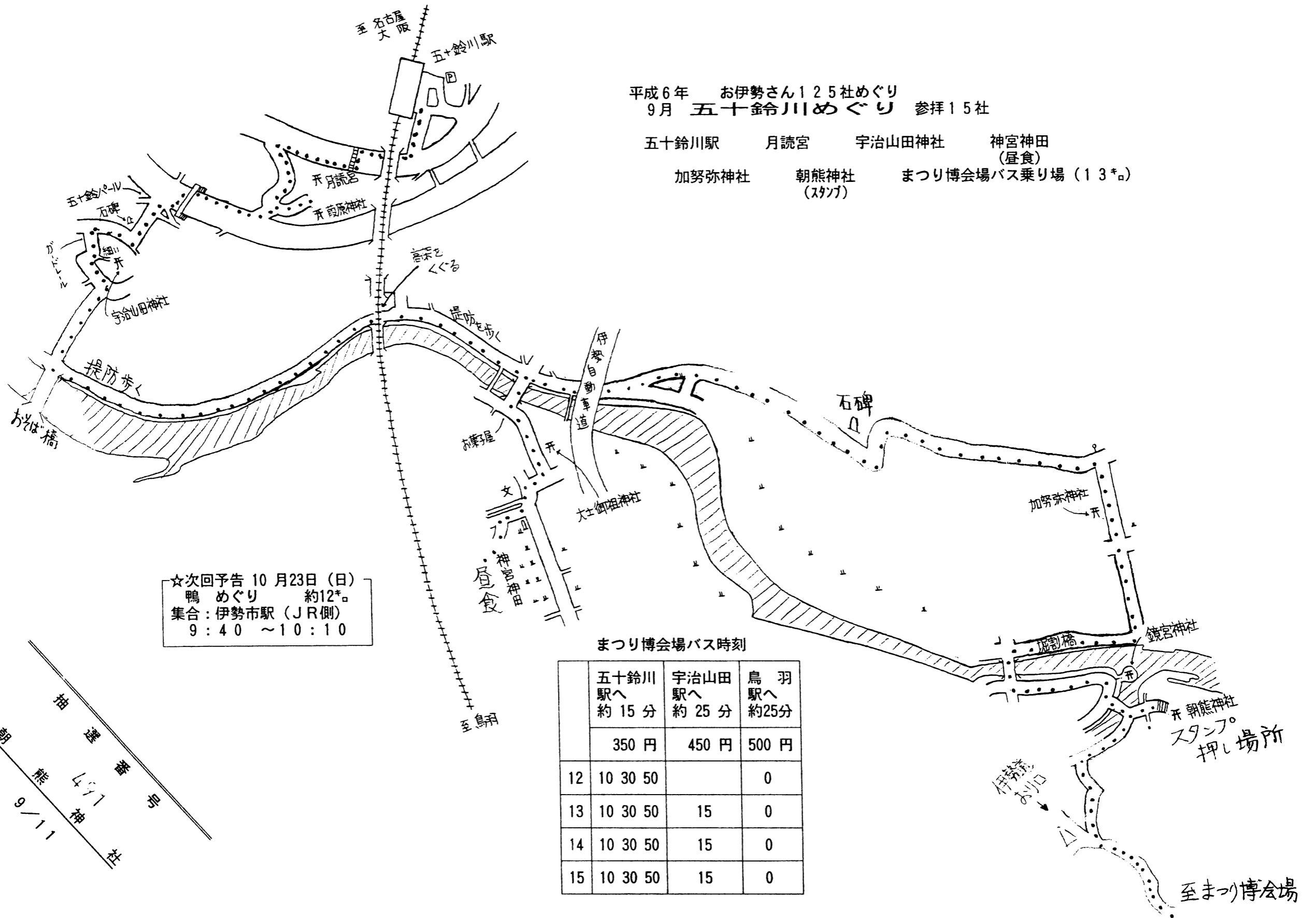


平成6年 お伊勢さん125社めぐり
 9月 五十鈴川めぐり 参拝15社

五十鈴川駅 月読宮 宇治山田神社 神宮神田
 (昼食)
 加努弥神社 朝熊神社 まつり博会場バス乗り場 (13*)
 (スタンプ)



☆次回予告 10月23日(日)
 鴨めぐり 約12*。
 集合:伊勢市駅(JR側)
 9:40 ~ 10:10

まつり博会場バス時刻

	五十鈴川 駅へ 約15分	宇治山田 駅へ 約25分	鳥羽 駅へ 約25分
	350円	450円	500円
12	10 30 50		0
13	10 30 50	15	0
14	10 30 50	15	0
15	10 30 50	15	0

抽選券
 9/11
 抽選券
 9/11

五十鈴川めぐり

◎葭原神社（皇大神宮末社） 祭神 佐々津比古命 伊加利比売命
宇加乃御玉御祖命

北中村の北のはずれに月読の森があり、その南端に位置する。御幸道路より月読宮へ参り、裏参道に出ると左手。国道23号より裏参道に入ると右手にある。中世、田の神社とともに社地不明であったものを、明治6年この地に再興した。田野守護の神である。

殿舎

正殿	神名造板葺南面	壹宇
王垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

○月読の森

月読の森の奥に皇大神宮の別宮が4社ある。現在、御幸道路よりの表参道と23号よりの裏参道が通じているが、以前は北中村よりの参道が一本あったのみであった。玉砂利の参道、杉の木立が深くみかげ石で築かれた手水舎も清楚で清々しい。

社殿は南面して4社並列している。向かって右より、月読荒御魂宮、月読宮、伊佐奈岐宮、伊佐奈彌宮である。月読宮は皇大神宮の御弟神、伊佐奈岐宮は御父神、伊佐奈彌宮は御母神を祭る由緒深い宮である。

◎月読宮（皇大神宮別宮） 祭神 月読尊

4社並列の右から2番目で一番大きい。これが4社の中心をなしている月読宮である。

月の神として、月の世界の支配神とされる。月は潮の干満を支配することから水利農業の神として昔から信仰されている。

奈良時代には月読社と称されていたが、延暦儀式帳には既に月読宮として宮号宣下を受けている。皇大神宮の御弟神として、皇室よりも特別の御崇敬を受けるに至ったことを示すものである。

殿舎

正殿	神明造萱葺鐵金物打立御階付南面	壹宇
瑞垣御門	猿頭門扉付	壹間
瑞垣	袖繰板打	壹重
鳥居	神明造	壹基
幟舎	切妻板葺	壹宇

第一鳥居	神明造	壹基
宿衛屋	切妻板葺	壹宇
修祓所	切妻板葺	壹宇

◎月読荒御魂宮（皇大神宮別宮） 祭神 月読尊荒御魂

月読宮の東にあり、向かって右端の宮である。祭神は月読尊荒御魂で月読宮の祭神の月読尊和御魂に対して申し上げたものである。これは、皇大神宮の本宮を和御魂宮とするのに対し、その荒御魂をお祭りする荒祭宮のあるのに倣ったものといえることができる。

奈良時代の宝亀三年八月（続日本紀）に、荒御玉命の社を官社（国家公認の官幣供進社のこと）に列し、次いで延暦儀式帳時代には宮号を加えられるに至った。

戦国時代、一時、遷宮が行なわれず、ために長い間月読宮の中に合祭せられて来たが、明治六年に至り旧に復するに至った。月読宮を本殿と称するに対し月読荒御魂宮を小殿といっている。

殿舎

正殿	神明造萱葺鐵金物打立御階付南面	壹宇
瑞垣御門	猿頭門扉付	壹間
瑞垣	袖繰板打	壹重
鳥居	神明造	壹基
幄舎	切妻板葺	壹宇

◎伊佐奈岐宮（皇大神宮別宮） 祭神 イザナギノ尊

4社のうち、向かって右から3つ目の社である。祭神は天照大神の御父君イザナギノ尊をお祭りする。延暦儀式帳によれば、本社（伊佐奈岐宮）の御鎮祭は奈良時代で、同時代の終り、光仁天皇の宝亀三年（1432）に官社に列せられた。次いで平安中期、清和天皇の貞観九年（1527）に宮号宣下のことあり、ここに始めて伊佐奈岐宮と称するに至った。

殿舎

正殿	神明造萱葺鐵金物打立御階付南面	壹宇
瑞垣御門	猿頭門扉付	壹間
瑞垣	袖繰板打	壹重
鳥居	神明造	壹基
幄舎	切妻板葺	壹宇

◎伊佐奈彌宮（皇大神宮別宮） 祭神 イザナミノ尊

4社のうち、向かって最左端（西）の社が伊佐奈彌宮である。祭神は天照大御神の御母神のイザナミノ尊をお祭りしている。伊佐奈岐宮と同じく奈良時代の鎮祭であり、宝亀三年に官社に列し、貞觀九年に宮号宣下があった。思うに、両社合わせて皇大神宮の御両親の大神であることを以て、皇室より特別に御尊崇あらせられたことによるものであろう。

伊佐奈岐宮を大殿、伊佐奈彌宮を小殿と称している。

戦国時代には遷宮が行なわれず、伊佐奈岐宮のなかに合祭されていたが、明治六年に復するに至った。

殿舎

正殿	神明造萱葺鐵金物打立御階付南面	壹宇
瑞垣御門	猿頭門扉付	壹間
瑞垣	袖繰板打	壹重
鳥居	神明造	壹基
幄舎	切妻板葺	壹宇

○興玉の森

県営陸上競技場より御側橋を渡ると左手に小高い丘陵の森が見えてくる。これを興玉の森という。

興玉神、即ち猿田彦大神（あるいはその子孫の大田命ともいう。）が住んでいたという旧跡であることから、ここを興玉の森と呼ぶ。一名を上ノ杜とも、猿田彦の森ともいう。

この森の小山の頂上西側に石壇がある。これが興玉神の拜所である。元は、この石壇の前に鳥居が立っていた。

ここは昔から、猿田彦の子孫である宇治土公氏が祖先の祭である氏神祭をしたところで、四月の初の申の日にこの祭が行なわれる。

宇治土公氏の祖、興玉神（猿田彦大神）は五十鈴川上の地主であり、その子孫の大田命は楠部の神田を献上している。宇治土公氏の名自体も宇治の土公（豪族）であることを示している。この地に宇治土公氏の祖神の墳墓があり、氏神祭りが行なわれてきたことも当然といえよう。

◎宇治山田神社（皇大神宮摂社） 祭神 山田姫命

興玉の森の南にある。元は五十鈴川に望んだ所にあつたといわれる。

鎮座地の山田の守り神で、倭姫命の御代祭られた神社である。境内は苔が美しい。

中世頽廃し、寛文三年の再興にも漏れたが、明治二年、現在の地に再興した。祭神は大水神の子、山田姫命である。

殿舎		
正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

◎那自売神社（皇大神宮末社） 祭神 大水上御祖神
御玉御裳乃須蘇比女命

宇治山田神社に同座、倭姫命の祝い給うた神社で、倭姫命世記によると、家田田上宮（神宮神田の後ろの山にある。）より幸行して奈尾之根宮に坐せしことがみえている。

奈尾之根とは、一つに納米と書き、今の宇治中之切町のあたりにあたる。本社の社名「ナジメ」は、「ナウシメ」のなまったもので、その社地はもと中之切町付近にあったと思われるが、中世以後は不明となり、再興をみなかった。現在は宇治山田神社に同座している。

○楠部の里

月読の森を出て、北中村から楠部の里へと向かう。現在の楠部町とよばれる所は広く、五十鈴中学のある丘の一部、久世戸町のあたりまでひろがる。月読の森の北にある池を大楠池と呼んでいる。この池は、今は池となっているが、往古は五十鈴川の流れの一つで、洪水のとき、河流変遷のため池として取り残されたものである。

このあたりを古くは河原田村と呼んでいるのは五十鈴川の河原にできた村であることを示しているものである。

楠部の里は五十鈴川を挟んで南北にわかれている。南の山の裾を尾崎といい、北の田野を楠部と呼んでいる。

この尾崎の丘陵台地の森、もと八柱神社のあったあたり一帯の高台を家田の森といい、家田田上行宮の旧跡がある。家田というのは地名で、この宮はその御神田のあたりにある行宮を意味するものである。

ここは、垂仁天皇の御代、皇大神宮御遷幸の途中、五十鈴川をさかのぼられたとき、ここに一時鎮まりました宮所の趾を残したものである。

○奈尾之根宮 伊勢市中村町

次に奈尾之根宮にご遷幸される。この宮は、内宮の正北約1.5km中村町の東、俗称「皇女の森」の地の西あたりにある。

皇女の森は、今、名残の木が二本生えていて、田の真ん中に残っている。

ここで大田命が参り、「佐古久志呂宇遅の五十鈴の河上に靈地あり」と申し上げると、倭姫命がその地を調べられて「伊勢加佐波夜の国は美しき宮処有り」と定め給うことになる。

◎大土御祖神社（皇大神宮摂社） 祭神 大国玉命 水佐々良比売命
水佐々良比古命

楠部の里を過ぎ、伊勢市役所四郷支所を右折し、五十鈴橋を左折、坂を下ると左手のこんもりした森の中にある。

社殿二宇のうち、前の方の神社が大土御祖神社、後ろの方が国津御祖神社である。

大土御祖神社は、皇大神宮儀式帳には、ただ大土神社とのみ記され、祭神は国生神の子、大国玉命、水佐々良比古命、水佐々良比売命の三柱をお祭りしている。もとは楠部の里大地の守り神として、この里を生みなした神と、この里の農耕を助ける水の神をお祭りしたものである。垂仁天皇の御代、倭姫命によって奉斎された神社となっている。

平田篤胤によれば、大土の神というのは猿田彦神（あるいはその子孫の大田命）のことで、この神社はいわゆる宇治の狭長田を開拓したこの地の豪族猿田彦大神（あるいは大田命）をお祭りした神社であるといっている。

儀式帳にも、宇治土公氏の祖先である大田命がここで奉斎し、御神田を献上されたことを記している。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

◎宇治乃奴鬼神社（皇大神宮末社） 祭神 高水上命

この社は、もと楠部と北中村との境にある、皇女の森の東隣、五十鈴川のあたりにあった神社である。

戦国時代、社地湮滅したことにより、明治四年ここに同座された。倭姫命の御世の鎮祭にかかり、祭神は大水上の御子、高水上命をお祭りしている。

社名の奴鬼というのは、新しく開墾した田野のことで宇治楠部の新田灌漑の守護神として祭られたことがわかる。神宮要覧にも、大略同様のことが記されている。

◎国津御祖神社（皇大神宮摂社）

祭神

宇治比売命

田村比売命

大土御祖神社と同宮域の奥（東）にある。皇大神宮の摂社で、祭神は国生の神の子、宇治比売命と田村比売命をお祭りしている。

国津御祖神というのは、楠部の里を守護する国の神のことで、その神名を称えていうときは宇治比売命といい、また楠部の守り神として田村比売命と申し上げる。

この付近を昔から宇治狭長田といい、宇治六郷とって、岩井田、岡田の上二郷（現在の宇治）、北中村、楠部、朝熊、鹿海の下四郷（旧四郷村）との村々が五十鈴川に沿い、田野、村落を形成している。

ここには幾多の神々が鎮祭されているが、そのうち楠部の御神田を中心として、ここに大土御祖神と国津御祖神とが祭られていることは、ここが狭長田の中心であり、古代生活の根拠地であったことを示している。

神社の存在は、そのまま古代生活の精神的象徴であり、中心であることを看取することができる。また、これらの神社が倭姫命の当時に鎮座されたことは、皇大神宮の鎮座と並んで、古くからこの土地の産土神として祭られていたことを示している。

寛文三年現地に再興

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

◎葦立弓神社（皇大神宮末社）

祭神

玉移良比女命

国津御祖神社に御同座。もとの社地は不明であるが、その祭神が国津御祖神社の祭神である宇治比売命の御子、玉移良比女命を祭っていることから、やはり楠部の里近くに産土神として鎮座していたことが想像される。

鎮座は倭姫命の御世であるといわれている。明治四年、国津御祖神社と同殿内に再興を見たものである。

神宮要覧にも、大略同様の記述あり。

東隣に四郷神社があり、前に四郷小学校がある。その間の道路は、もと朝熊登山電車が走っていた。

）神宮神田

古くは御刀代田、宇遅田、拔穂田、御常供田とも呼ばれ、普通には楠部の大御田と呼ばれている。皇大神宮の御神供米耕作の神田である。

起源は、垂仁天皇の御代、皇大神宮の鎮座のときに定められたといわれている。

倭姫命世記によれば、皇大神が御遷幸の途中、この楠部家田田上宮にこられたとき、この土地の国神である宇治土公氏の祖神大田命が大御神を奉迎し、この神田を奉獻されたということが伝えられている。

延暦儀式帳並びに延喜大神宮式によると、一千年以上の昔から、この田の広さは一町歩と規定されている。昭和九年には三町二歩の作付反別の神田となった。

ここで取れる御料米は、神嘗祭と六月、十二月の月次祭に奉る由貴大御饗の御料に供されることになっている。

・ 神田下種祭 四月下旬

神田の苗代に初めて稲種を下ろしまつる祭りである。このとき次のような御田歌が歌われる。

天鎌や まさきのかつら かさにきて
御田うちまつる 春の宮人

・ 御田植式 五月下旬

揃いの衣装の植手、苗配、楽手、舞夫によって賑やかに御神田に早苗が奉植される。奉植が終ると、大土御祖神社の境内に至り、ここで手振りも愉快に豊年踊りが踊られる。

・ 拔穂祭 九月中旬

ふさふさと実った稲穂を抜き奉り これを両宮（皇大神宮は御稲御倉 豊受大神宮は忌火屋殿）に御納めする行事である。

○ 宇治家田田上宮 伊勢市楠部町家田

滝原宮を出られた倭姫命は、度会郡度会町一之瀬の和井野から同町久具、都布良、沢地まで来られ、ここから船で鷺取小浜に上陸され、さらに船で度会郡二見町江を通り、五十鈴川をさかのぼって、鹿乃見（伊勢市鹿海町）から家田（伊勢市楠部町）に着かれ、宇治家田田上宮で休まれた。この付近には、現在、神宮御神田がある。

このあたりを古くは、「布施の里」とか、「家田」ともいわれた。また、五十鈴川を境に北を楠部、南を尾崎と呼んでいた。この尾崎の丘

陵台地を家田の森といって、その中に家田田上行宮があったといわれている。

◎加努彌神社（皇大神宮末社） 祭神 稲依比女命

鹿海橋より東鹿海の集落を抜け、右に曲がると耕地整理の碑があり、その右手の田の中の小さな木立に鳥居が見えるのでわかりやすい。

加努彌という社名は、地名の鹿海のこと、ここは昔、五十鈴川の河口を遡って海の潮の寄せていたことを示す地である。

大神宮本記に、倭姫命がこの地に至ったとき、苗草を戴いた老女に「何故にかくするや」と問われた。それに対して老女は「此の国はかのみやもする」と答えたことにより、其地を鹿乃見と名付けたという。

中世以後、社地明らかならず、神宮より西鹿海村の産土神を本社として祭祀をしようとしたが、明治14年、村民等産土神をもって神宮末社とするを、おだやかでないといふ地方庁へ申し出たので、明治19年、さらにその東方の新地へ鎮祭することとなった。これが現在の加努彌神社である。石壇のみを築き、石神一体をお祭りする形式をそのまま伝えている。

殿舎

石畳	南面	壹区
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

◎鏡宮神社（皇大神宮末社） 祭神 岩上二面神鏡靈

五十鈴川と朝熊川の合流点に鎮座する。社の東北に面する水涯に一つの大きな岩がある。この岩のうえに、早くから二面の神鏡をお祭りしてあったのが本社由緒である。すなわち鏡宮は、神鏡を祭る宮であることから称されたものである。

御神座の岩は、この由緒によって現在本柵を結び神聖視されている。社殿背後の五十鈴川の川中に、虎石、潮干石と呼ばれる奇岩がある。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

◎朝熊神社（皇大神宮摂社） 祭神 桜大刀自神 苔虫神
朝熊水神 の3座
（神宮本記には大歳神1座）

◎朝熊御前神社（皇大神宮摂社） 祭神 朝熊御前神

鏡宮神社の対岸、東側が朝熊神社、西側が朝熊御前神社である。

朝熊神社は、小高い丘と森の中にある皇大神宮第一の摂社であり、古来、尊信厚い神社である。

朝熊というのは、朝熊山に源を発する朝熊川に沿う小集落であり、この川は浅く隈をなして曲がり流れてくることから、アサクマと称されたものである。

石段を昇ると社殿が二つあり、向かって右が朝熊神社であり、左が朝熊御前神社である。朝熊神社は、古く儀式帳には小朝熊神社といわれ、祭神は、桜大刀自神 苔虫神 朝熊水神の三柱で、いずれも朝熊平野の田圃を守る五穀の神、水の神である。

朝熊御前神社も皇大神宮の摂社である。延暦儀式帳の小朝熊神社の條に、「前社一処」とあるのがこれで、前社というのは本社の御前にある付属の神社の意味である。

朝熊神社

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

朝熊御前神社

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

神宮の神田と御園について

神 田

伊勢市楠部町字家田

神宮の日別朝夕の大御饌祭や、一年中のお祭りにそなえまつる御飯・お餅・白酒・黒酒・醴酒の御料のお米を作る神田である。

起源は古く皇大神宮御鎮座の時にさかのぼり、倭姫命のご創定と伝えられている。総面積は九九三・一八アール(内神田二九七・五一アール)あり、灌漑用水は五十鈴川の清水を用い、清浄栽培されている。

栽培品種は粳米は倭・チヨニシキ・コシヒカリ・大空・ヤマヒカリ・日本晴・黄金晴・ナギホなどで、糯米は神楽糯・恵糯である。保存品種として瑞垣原種・瑞垣一号・二号・三号・荒垣・瑞垣糯・古代赤米・黒米などを栽培している。

神田のお祭りは次のとおり行われる。

神田下種祭 四月初旬

神田御田植初 五月中旬

抜穂祭 九月初旬

なお神宮には

伊雑宮御料田 志摩郡磯部町 一五・八アール

がある。伊雑宮御料田のお田植式と楠部町神田のお田植式は昭和四十六年三月十七日三重県の無形文化財に指定された。

御 園

度会郡二見町字溝口

神宮の日別朝夕大御饌祭や、一年中のお祭りにたてまつる蔬菜・果実を作る御園である。

明治初年までは各地の旧神領から生産された蔬菜類が備進されたが、明治四年神宮御改正のためとりやめられ、明治三十一年この地に九九・二アール余りを購入し、その後大正三年、昭和十年に増歩、整備し現在一七四・四アールあり、清浄栽培されている。

栽培している蔬菜果樹は、

甘柿・渋柿・梨・苹果・李・桜桃・桃・栗・温州蜜柑・香橙・紀州蜜柑・八朔

セミノール・伊豫柑・カラ・三宝柑・春光柑・ヤラハ・金柑・夏橙・枇杷・葡萄

大根・蕪・人参・牛蒡・薯蕷・里芋・慈姑・連根・薑・百合根・馬鈴薯・蕃茄

茄子・枝豆・豇豆・豌豆・鵲豆・菜豆・蚕豆・白菜・しろな・体菜・小松菜

ビタミン菜・水菜・花椰菜・ブロッコリー・甘藍・苜蓿・レタス・サラダ菜・ちしや

菠薐草・芹・恭菜・独活・胡瓜・南瓜・越瓜・銀甜瓜・蒨などである。

御園のお祭りは、三月春分の日御園祭が行われる。

神宮神田の御祭儀

○神宮神田

神宮に於いて、毎日朝夕の二度奉仕せられて、日別朝夕大御饌祭や、一年中のお祭りに神さまに奉る神饌の御飯お餅並びに白酒黒酒醴酒の御料のお米は、伊勢市楠部町の神宮神田で作られている。この神田の起源は極めて古く御鎮座当時にさかのぼり、倭姫命の御創定と伝えられている。

神田の面積は、約三ヘクタールで抜穂田を中心として二十一枚に区画されている。五十鈴川の清水を灌漑用水とし御稲の種類は倭を始め、粳米・糯米合わせて十数種栽培している。

この神田に関するお祭りは、昔両宮で鍛山神事と大神田祭と抜穂神事とが行われていたが、今日ではこれに相当する次のようなお祭りが執り行われている。

○神田下種祭

耕作始め並びに忌種下しのお祭りで、四月初めに行われる。先ず忌鍛山の麓の山口祭場で山口に坐す大神をお祭りし、忌鍛が美わしく出来上がるようお祈りして、童男が忌鍛で御山に入るについての草を刈る行事を行い、つゞいて忌鍛山頂に上り、木本に坐す大神をお祭りし、童男がイチイ樫の御木を伐って忌鍛を奉製しここで禰宜以下奉仕員は、まさきのかづらを烏帽子につけて下山、神田祭場にて神饌を奉奠して神田守護の神を祭った後、御田打並びに種下しの行事がおごそかに執り行われる。この時御田歌を唱和する。

あめくはや まさきのかづら かさにきて
みたうちまつる はるのみやびと

○神宮神田御田植初

古くは御田祭といわれ、その起源は明らかではないが鎌倉時代以後、吉野室町時代頃と推定される。

明治四年十一月旧神田の土地と共に御田祭も中絶、明治廿二年神田が再興、大正十三年御田植行事も再興せられ現在に至った。

御田植初式は毎年五月、楠部の神宮神田御田植祭保存会会員によって奉仕される。其の服装は、神楽奉仕の笛方(二人)さくら(二人)楽打(二人)小鼓(一人)太鼓(一人)の九人は素襖烏帽子をつけ、中啓と御田扇とを持ち、舞人(十人)楽昇(四人)団扇持(二人)の十六人は子持帷子をつける。なお舞人は黄色の襷をかける。御田植祭保存会会員は子持帷子に菅笠、青襷で、女子は菅笠を冠り、手甲、脚絆をつけ、白衣に赤襷を掛け、赤裳をつける。

当日奉仕員一同神田の更衣所前で御塩のお祓いを受けた後、衛士の前駆により権禰宜、宮掌、作長各一員、作丁二員、楽人笛三員、楽打二員、さくら二員、太鼓一員、小鼓一員舞人十人、御田植奉仕の保存会会員の順序に

よって神田祭場に向う。神饌並びに神酒を奉奠して神田守護の神を祀った後、作長は権禰宜より早苗をうけこれを神田の中央、西、東に投げる。投げ終って作丁以下全員にて苗を植え始める。

御田植中楽員がにぎやかに鼓吹をつづける。かくして三枚の御田を植終えると蛭子、大黒の像を描いた二本の大団扇持二人が田の中央に進み右回りに三回回り終って南北に分れ団扇を合わせる。(これを俗に団扇合わせという。)其の際東側の田の畦に於いて舞人十人が右手に蛭子又は大黒を描いた扇を持ち左手に羽団扇を持ち、「やあ、」と呼称しながら、行司取りという舞踏を行う、羽団扇は七本の竹片を組み、其の上に紙を貼った長さ三尺四寸、上の幅約三寸のものである。この行事が終ると大団扇持、楽員、舞人の順序にて全員御田を出て踊りながら皇大神宮撰社大土御祖神社境内に参入する。これを祝入りとい、その時には左手に羽団扇、右手に扇を持ち静かに練り歩きながら踊る。

かくして社前で一揖した後、所定の位置につき、更に東西五人づつに分れ、祝入りと同じ様に、南回り回転を三度行う。これを「ほこり」という。其の時「はえや、はえ」という掛け声をかける。

次に「舟漕」といって舟を漕ぐ様を真似た舞踏を行う。

次に「とう舞」といって素襖烏帽子を着けた舞人一人が進み出て、藁打、縄ないの様から初めて、大鼓を米俵に擬し、衣装の様子を模し、その作り上げた米俵を、素襖烏帽子の御田役人が、かついで一回転し、倉の中へ運び込む状を行い、次に舞人一名が同じことを繰り返す。以上の順序にて三回繰り返してこの行事を終る。最後に再び「ほこり」を為し笛方が七折の吹奏を終って、神職が笏を以って大団扇を破り、参集の人々競って之を破りとることになっている。

神宮の御田植式

(伊勢市楠部町神宮神田 志摩郡磯部町伊雑宮御料田)

は昭和四十六年三月十七日三重県の無形文化財に指定された。

○抜穂祭

九月上旬、成熟した稲穂を抜き奉るお祭で神田祭場にて神田守護の神に神饌を奉奠した後、忌鍛にて抜穂を奉仕する。

神田下種祭と抜穂祭は神嘗祭に附属したお祭りになっている。

○伊雑宮御料田御田植式

志摩郡磯部町上之郷御鎮座の皇大神宮別宮伊雑宮の御料田(作付面積約一一・七アール)の御田植式の起源は確かな実証を得ることはむずかしいが、相当古くより行われていた様で、香取神宮、住吉大社の御田植祭と共に日本三大御田植祭として有名なものである。無形文化財として助成されることになったことは前述の通りである。

御田植式は毎年六月二十四日で、古来磯部十九郷の村人によって交替で奉仕されている。

奉仕員一同そろって伊雑宮に参拝、修祓を受けて御田に向う。其の順序は先頭に、えぶり指二人、立人六人(以上八人は二十代の青年)で、菅笠を戴き中形の襦袢を着し、紺の股引に手甲をつける。次に早乙女六人(其の先頭の一人を奥若、次の一人を「さい」若という)共に十二、三歳から十五、六歳の少女で、顔に白粉をつけ、まゆをひき、菅笠を冠り、白装束の上に緋の襷をかける。次に「さ、ら」摺二人、共に十歳前後の少年で、菅笠を冠り、モスリンの派手な襦袢に紫色の脚絆をつける。つづいて太鼓打一人これは七、八歳の童男で、かつらを冠り、作り眉をして少女に扮装し、介添人が附く。次に笛二人、大鼓一人、小鼓一人、謡六人(この内一人は謡頭)以上十人は青年男子にて素襖烏帽子を着ける。行列は以上の通りで、一同跣足である。御田の西側畦上に長さ三丈ほどの青竹が杭に縛って立てられ、竹の先端に刺鬚がつけられている。

やがて立人及び早乙女等が御田に下り立つと立人が奥若の手を引いて先行し、次に「さい」若、つづいて残る四人の早乙女が順次に手を取って苗場を三周半し、それが終ると苗取に着手する。その時立人が青竹を杭より解き、三度扇いで後、御田の中心に向って倒すと、こゝに近郷漁村の青年が裸になって田に入り、竹の奪い合いを行う。その争奪の有様は頗る勇壮である。その竹を持ち帰って船霊に祭り、大漁満足或は漁業繁栄、海上安全のお守りとするのが信仰となっている。

竹取りが終るといよ 御田植が始められる。一列に並んで植えながら退いて行く。その間、謡方、鼓方、笛方、さくら方、太鼓方が調子をそろえて囃し立てる。一退りに謡曲二番を謡うことになっている。半分を植え終った頃、一旦休止し、さくら方二人が田の中で舞踏する。これを早取挿という。此の間、若布の肴で小宴を行う。更につづいて残りを植え終る。

かくて一同列をなして練りながら踊り込み伊雑宮に進み御田植式を終ることになっている。

踊り込み唄

- サアエイエイシャントセ
- 一、サア今年や世がよて穂に穂がさいて
サア樹は取り置け箕で量る、
- 一、サア笛や太鼓におどこどに 植える
乙女は百合の花、

神宮司廳